

牧師室から（6月21日）

私の父は米の味に<sup>こだわ</sup>っていた。私にはそれが理解できなくて、米の味なんかどうでもいいのではないかと思ったりした。それだけではなく、グルメであった父は他の食べ物にもうるさくて、結構母を困らせた。ときには幼かった私を連れて、なぜか二人であっちこっちのレストランや酒場まで行くこともあった。珍しい食材などがあって、今思うと、よくも幼い子供にそのようなものを食べさせたな、という気持ちになる。山菜や野生の動物の肉など。もくもく大人並みの量を食べこなす私を嬉しそうに見ていた父の笑顔を覚えている。そのお蔭で何でもよく食べれる私は、日本に来てからも食べ物の好き嫌いに困ったことはない。

父の晩年には脳梗塞で倒れて長年横になっていた。また、違う面で母の苦労は続いたが…。日本から電話をすると、「早く帰って来なさい。女の子は夜遅くまで歩くと危ないよ」と近くにいるような、結婚前の、若い時の私の記憶に止まって父は話をする。寂しかった。

父とは最後かも知れないという気持ちで韓国の家を訪ね、父に病床洗礼を授けた。かすかな声で「アーメン」と言う父の頭に手を置いて祈りをしながら、教会に行く私に猛反対をし、神学校に入った時は父の怒りでしばらく家を出るしかなかった時の辛い思いが癒されるような気がした。

最近ふっと思うと、食べ物にうるさくなっている自分に気づく。そして、米の味をやっとわかったような気がする。やはり、父の遺伝子かな…。

父の日を迎えながら、今は天国にいる父との思い出が浮かんでくる。

神様の創造の御業と、御導きは本当に不思議である。

（鈴木善姫牧師）